

## 「母児同室と妊産婦の精神面支援の関連」 - 母児同室と母性育成 -

分担研究：妊産婦の精神面支援とその効果に関する研究

研究協力者 金澤 浩二・稲福 薫\*

**要約：**母児同室、半同室、異室の3施設での異常のない初産婦(褥婦)それぞれ80例、57例、68例を対象とし、母性理念、対児感情、育児動機、および、マタニティ・ブルーズに関するアンケート形式による調査を行った。母性理念尺度については、同室/半同室で母性育成がより促進される方向にあった。対児感情尺度については、同室/半同室で児を受け入れる気構えがより整いつつあることが判明した。ただ、育児動機尺度については、同室/半同室で育児への動機がより助長されるという傾向はみられなかった。一方、マタニティ・ブルーズについては、同室でも異室に近いリスクであることが注目され、半同室ではそのリスクが低かった。以上のことより、母児同室/半同室は、母体の精神面支援に、とくに母性育成という視点からみて、望ましいシステムといえる。ただ、このようなシステムを推進していく上には、医療看護側の十分な指導とサポート、家族の理解が必須であると考えられる。

**見出し語：**母児同室、母性育成、マタニティ・ブルーズ

**研究目的：**母児同室が妊産婦の精神面支援にどのように役立つかという課題に対し、母児同室の推進を前提として、①母児同室の利点、特に精神面支援への利点を、異室との比較において、客観的に明確に示うる可否か、②医師、看護婦/助産婦、また妊産婦の母児同室に対する意識を把握する、という二つの課題を設定した。

②の課題に関しては、前年度に全国規模のアンケート調査を施行した<sup>1)</sup>。全体としての母児同室採用率は50-60% (同室のみの施設は10%未満で、24-48に同室とする半同室の施設が多い)という現状にあって、同室への関心は、非実施施設で比較的強く、とくに医師の20-30%関心を持っていないこと、同室への評価は、非実施施設では望ましいとするものは50-60%に過ぎず、普及されるべきでないとするものが20-30%に達すること、が判明した。

このような現状にあって、過去において母児同室の欠点とされていた感染などの問題がほぼ解決された現在、同室への関心と理解を深めていくためには、その利点をより明確に提示していく必要があると考え、本年度は①の課題に関して検討した。

**研究方法：**母児同室と妊産婦の精神面支援という視点に立って、とくに同室と母性育成との関連を探るための検討を行った。

### 1. 対象

臨床的に異常のない初産婦(褥婦)とし、次の3施設を設定した。また、参考として、同3施設にて妊婦健診中の初妊婦にも同様の検討を行った。

同室：分娩直後からの完全な母児同室

半同室：24-48時間後からの母児同室

異室：授乳室以外は完全な母児異室

### 2. 方法

精神々経学的判定尺度として、花沢<sup>2)</sup>による母性理念判定尺度、対児感情・育児動機判定尺度を使用した。母性理念判定尺度(表1)は、はじめからそれぞれ3項目づつが一組となっており、最初の2項目が肯定項目、最後の1項目が否定項目となっている。対児感情・育児動機判定尺度(表2)は、はじめからそれぞれ3項目づつが一組となっており、うち最初の項目が接近項目、次の項目が回避項目、最後の項目が育児動機についての項目となっている。また、マタニティ・ブルーズ判定尺度として、Stein自己質問表<sup>3)</sup>の日本語版を使用した。

アンケート調査は、1994年6月から12月の期間に、インフォームド・コンセントを得た後、以下のように実施した。

初産婦：退院前日/当日、褥室にて、母性理念、対児感情・育児動機、マタニティ・ブルーズの三つ

初妊婦：妊娠中期、外来にて、母性理念、対児感情・育児動機の二つ

各項目について決められた点数によって得点を算出し、同室/半同室と異室との間の有意差検定はStudent t-testによった。

表1. 母性理念判定尺度

	非 常 に う る ま い う	そ う 思 う	ど い ち も し も な い	ち が あ る	非 常 に う る ま い う
1. 妊娠は、女にとってすばらしい出来事である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
2. 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である。...	_____	_____	_____	_____	_____
3. 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである。...	_____	_____	_____	_____	_____
4. 赤ちゃんを産んで始めて、子どものかわいさがわかる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみもがまんできる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
7. 女は子どもを産むことで、自分が生きた証跡を残すことができる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
8. どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである。.....	_____	_____	_____	_____	_____
9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない。.....	_____	_____	_____	_____	_____
10. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
11. 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
12. 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらぬほうがよい。.....	_____	_____	_____	_____	_____
13. 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
14. 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
15. わが子を他人にあげても、自分の仕事を続けるべきである。.....	_____	_____	_____	_____	_____
16. 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた意味がない。.....	_____	_____	_____	_____	_____
17. 子どもがいることで、家庭生活はより楽しくなる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
18. 育児は妻だけでなく、夫も担うべき仕事である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
19. わが子の成長を見とどけるために、長生きをしななければならぬ。.....	_____	_____	_____	_____	_____
20. 母親がわが子を自分の一部だと感じるのは当然である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
21. 育児に追われていると、若さが早く失われる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
22. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
23. 子どもを育てるのは、生みの田が最良である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
24. 育児から解放される時に、人間らしい自由な生活ができる。.....	_____	_____	_____	_____	_____
25. わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活に張りが出る。.....	_____	_____	_____	_____	_____
26. 育児に専念したいというのが、女の本音である。.....	_____	_____	_____	_____	_____
27. 母親が子どもの成長を生き甲斐にするのは間違っている。.....	_____	_____	_____	_____	_____

表2. 対児感情・育児動機判定尺度

	非 常 に あ い わ い た い	そ の と ま り	少 し の と ま り	そ ん な い	こ と は な い	非 常 に あ い わ い た い	そ の と ま り	少 し の と ま り	そ ん な い	
あたたかい.....	_____	_____	_____	_____	_____	あかるい.....	_____	_____	_____	_____
よわよわしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	なれなれしい.....	_____	_____	_____	_____
さわりたい.....	_____	_____	_____	_____	_____	そばにいたい.....	_____	_____	_____	_____
うれしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	あまい.....	_____	_____	_____	_____
はずかしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	めんどくさい.....	_____	_____	_____	_____
おんぶしたい.....	_____	_____	_____	_____	_____	わらわせたい.....	_____	_____	_____	_____
すがすがしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	たのしい.....	_____	_____	_____	_____
くるしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	こわい.....	_____	_____	_____	_____
あやしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	見ていたい.....	_____	_____	_____	_____
いじらしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	みずみずしい.....	_____	_____	_____	_____
やかましい.....	_____	_____	_____	_____	_____	わづらわしい.....	_____	_____	_____	_____
そだてたい.....	_____	_____	_____	_____	_____	くちづけしたい.....	_____	_____	_____	_____
しろい.....	_____	_____	_____	_____	_____	やさしい.....	_____	_____	_____	_____
あつかましい.....	_____	_____	_____	_____	_____	うつとうしい.....	_____	_____	_____	_____
だっこしたい.....	_____	_____	_____	_____	_____	そい寝したい.....	_____	_____	_____	_____
ほほえましい.....	_____	_____	_____	_____	_____	うつくしい.....	_____	_____	_____	_____
むずかしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	じれつたい.....	_____	_____	_____	_____
はなしかけたい.....	_____	_____	_____	_____	_____	ほほずりしたい.....	_____	_____	_____	_____
ういういしい.....	_____	_____	_____	_____	_____	すばらしい.....	_____	_____	_____	_____
てれくさい.....	_____	_____	_____	_____	_____	うらめしい.....	_____	_____	_____	_____
乳をあげたい.....	_____	_____	_____	_____	_____	手をにぎりた.....	_____	_____	_____	_____

研究結果：有効な回答が得られた初産婦(褥婦)は、最終的に、同室80例(平均年齢26.3歳)、半同室57例(平均年齢25.7歳)、異室68例(平均年齢26.9歳)であった。また、参考とした健診初妊婦は、同室施設で80例、半同室施設で37/33例、異室施設で43/37例であった。

1. 母性理念

肯定項目では同室、半同室で有意ではないがやや高得点である。否定項目では同室、半同室で異室に比較して有意の低得点である。

	褥婦(産褥)	妊婦(外来)
肯定		
同室	15.2+7.2(n=80)	13.6+5.5(n=80)
半同室	13.9+6.8(n=57)	12.8+8.1(n=37)
異室	13.4+6.1(n=68)	12.7+7.2(n=43)
否定		
同室	-2.4+3.5(n=80)	-1.6+3.1(n=80)
半同室	-2.7+2.7(n=57)	-1.6+3.3(n=37)
異室	-1.2+3.3(n=68)	-1.7+3.0(n=43)

\* p<0.05, \*\* p<0.005

2. 対児感情

接近項目ではほとんど差をみない。回避項目では同室、半同室で異室に比較して有意の低得点である。

	褥婦(産褥)	妊婦(外来)
接近		
同室	29.1+6.4(n=80)	28.0+5.9(n=80)
半同室	28.9+5.7(n=57)	26.4+5.7(n=33)
異室	28.0+7.1(n=68)	27.2+6.1(n=37)
回避		
同室	6.2+3.3(n=80)	8.6+4.5(n=80)
半同室	5.9+3.1(n=57)	8.7+4.9(n=33)
異室	9.0+5.4(n=68)	8.4+4.4(n=37)

\* p<0.001

3. 育児動機

同室、半同室と異室との間に有意差をみない。

	褥婦(産褥)	妊婦(外来)
同室	32.0+7.3(n=80)	30.4+7.3(n=80)
半同室	32.4+7.1(n=57)	28.8+6.9(n=33)
異室	31.1+7.3(n=68)	29.4+6.8(n=37)

4. マタニティブルース

同室では異室に近い高得点であり、これとの間に有意差をみない。半同室では異室に比較して有意の低得点である。また、8点以上の症例の頻度については、同室21.3%、半同室10.5%、異室22.1%である。

	褥婦(産褥)
同室	4.9+3.5(n=80)
半同室	3.6+2.8(n=57)
異室	5.3+3.5(n=68)

\* p<0.005

**考察:** 母児同室/半同室、異室それぞれの利点欠点については、既に多くの議論がなされてきている<sup>4)</sup>。とくに母児異室の利点については、母児の身体的管理がやりやすいこと、また、児感染の予防、母体育児疲労からの解除などが指摘されてきた。しかし、近時、産褥期の母児異室は、母児のより自然な身体的精神的結合の確立にマイナスになっているかもしれないという視点から、これら異室の利点とされるものへの疑問が提起されつつある。すなわち、母児の身体的管理という点に関して、今日の産科医療ではとくに母児異室であることを必要としていないようにみえる。むしろ、母児異室の利点とは、従来からの産科医療施設・設備、医療看護体制など、医療者側の立場、都合による利点のようにみえる。したがって、もし母児が産褥期にいっしょに過ごすことが、母児の自然な結び付きを助長するとすれば、今後、母児同室が推進されるべきであると考えられる。

本研究では、母児同室/半同室が、母児の精神的結合と関連して、母性育成にプラスになるか否かを、母児異室との比較において検討した。

まず、母性理念に関しては、同室/半同室で肯定項目への肯定的反応が強く表れる傾向にあり、また、その否定項目への否定的反応が強く表れており、母としての役割をより肯定する方向、すなわち、母性育成がより促進される方向にある。なお、これら褥婦では、それぞれの参考とした外来健診妊婦に比較し、このような母性理念がより形成されつつあることも窺われる。次に、より具体的な対児感情に関しては、同室/半同室でとくにその回避項目への反応が有意に減弱しており、児を受け入れる気構えがより整いつつあることが指摘される。ただ、育児動機に関しては、同室/半同室で、異室に比較し、それがより助長されるという傾向はみられていない。これらのことより、初産婦において、母児を産褥早期から接触させることは、母体はその児を受け入れて育てていく過程に、精神的に望ましい影響をおよぼすという可能性が示された。ただ、ここに得られた結果は、産褥4-6日というなお早い産褥期にある母体に精神面の評価である。Klausら<sup>5)</sup>の報告にみら

れる母児早期接触と1ヵ月後の評価のように、もし産後1ヵ月、半年を経過した時期まで追跡して再評価するならば、さらに興味深い結果が得られるものと推察される。

次に、マタニティ・ブルーズに関しては、同室では異室に近いリスクがみられることが注目される。半同室では異室に比較してそのリスクが低いと判断された。異室では、同室/半同室に比較し、ひとりである時間が多いため、考え込んだり憂鬱な気分になりやすいとの推測が可能である。一方、同室でもマタニティ・ブルーズへのリスクが高いという結果であった。これについては、同室では分娩直後から児が常時そばにいたことがかえって負担となり精神面に一時的な混乱が生じている可能性があり、個々のアンケート用紙をみると多分にその可能性が窺われた。

以上のことより、母児同室/半同室は、母体の精神面支援に、とくに母性育成という視点からみて、望ましいシステムと言えそうである。ただ、完全な同室にみられたマタニティ・ブルーズへのリスクは、このようなシステムを推進していく上には、医療看護側の十分な指導とサポート、家族の理解が必須であることを指摘しているようにみえる。

#### 参考文献

- 1) 金澤浩二: 母児同室と妊産婦精神面支援の関連 -母児同室に関する意識調査-, 厚生省心身障害研究 平成5年度研究報告書, p47, 1994
- 2) 花沢成一: 母性意識の発達, 母性心理学 (医学書院、東京), p9, 1992
- 3) Stein G: The pattern of mental change in the first postpartum week. J Psychosomatic Res, 24: 165, 1980
- 4) 金澤浩二、稲福 薫: 母性形成と母児同室, 周産期医学, 23:1455, 1993
- 5) Klaus MH, Jerauld R, Kregler NC, McAlpine W, Steffa M, Kennell J: Maternal attachment, Importance of the first-partum days. New Engl J Med. 286:460, 1972



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:母児同室、半同室、異室の3施設での異常のない初産婦(産婦)それぞれ80例、57例、68例を対象とし、母性理念、対児感情、育児動機、および、マタニティ・ブルーズに関するアンケート形式による調査を行った。母性理念尺度については、同室/半同室で母性育成がより促進される方向にあった。対児感情尺度については、同室/半同室で児を受け入れる気構えがより整いつつあることが判明した。ただ、育児動機尺度については、同室/半同室で育児への動機がより助長されるという傾向はみられなかった。一方、マタニティ・ブルーズについては、同室でも異室に近いハイリスクであることが注目され、半同室ではそのリスクが低かった。以上のことより、母児同室/半同室は、母体の精神面支援に、とくに母性育成という視点からみて、望ましいシステムといえる。ただ、このようなシステムを推進していく上には、医療看護側の十分な指導とサポート、家族の理解が必須であると考えられる。